

国際労働力移動—1980年代以降の傾向

茨城大学人文学部助教授 稲葉 奈々子

「貧しい国」から「豊かな国」へ

国境を越えた人の移動は近年の現象ではない。国境という概念がまだなかった時代から人は移動してきたし、たとえば移民国であるアメリカやオーストラリア、カナダは、建国以来の歴史が移民の歴史そのものであるといってもよい。

国際労働力移動、つまり出稼ぎのために国境を越える人々は、20世紀末から増加してきた。パリの地下鉄を建設したのは隣国から出稼ぎにきたベルギー人だったし、炭坑労働に従事してフランスの産業を支えたのはイタリア人やポーランド人だった。しかし大規模な国際労働力移動は、おもに旧植民地から旧宗主国に出稼ぎに行く人々が増加した高度成長期以降に起きた。これらの人の移動の特徴は、「南」の国と「北」の国の経済格差を背景として、「貧しい国」から「豊かな国」へ労働力の移動が起きているという点にある。

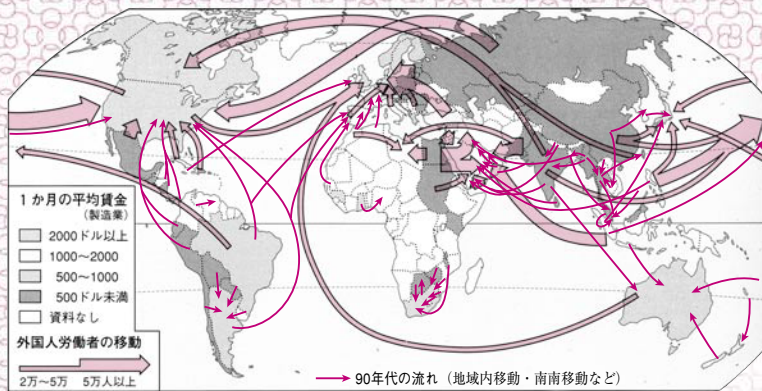
出稼ぎを目的として国境を越える人の動きは、1980年代を境に、それまでとは比較にならない規模に拡大した。これらの人々は、滞在は一時的で、出身国に残してきた家族に送金している場合が多い。もちろん、結果として出稼ぎ先の国に定住して、家族を呼び寄せるといふことも起きている。また、植民地の支配関係があった国の間に限らず移動が起きている。南アジアの国から、まずはじめは建設ブームの中東産油国へ、その後日本を含めたアジアの他の国に働きに行くようになった。国際労働力移動については、単身の男性がおもに建設や製造業で働き、やがて家族を呼び寄せて定住という図式でとらえられてきた。しかし、これ

は人の移動の一面にしか過ぎない。単身の女性の出稼ぎは、家事労働などケア労働中心に存在し、国連によれば、2000年には世界の移住者の49%を女性が占めている。

世界のなかの日本

日本における外国人労働者の数の増加も、こうした国際的な労働力移動の傾向のなかで考える必要がある。ともすれば、豊かな日本をめざして、世界中の貧しい国から人がやってくるかのようにいわれるが、日本もまた、世界規模での人の大きな移動のなかに位置しているにすぎない。2002年の国連の統計では、世界には出身国を離れて生活している人が、およそ1億7000万人いる。このうち難民は200万人と推定されており、残りの少なからぬ人々がさまざまな理由で国境を越えて生活しており、そのなかで出稼ぎ目的の移動が多数を占めている。ちなみに日本の2001年末の外国人登録者数は177万8462人で、総人口の1.4%が外国籍人口となった。

さて、日本の場合も、1990年代までは、在日韓国朝鮮人など戦前から日本に住んでいた人々とその子孫が外国人人口の多数であったが、この時期を境にして比率が逆転し、80年代半ば以降に日本に新たにきた外国人が外国人登録者の多数をしめるようになった。80年代半ばに日本に出稼ぎに来たのはまず第一にフィリピンやタイなど東南アジアからの女性たちであった。彼女たちがしばしばバーやスナックでホステスとして働いていたり、人身売買の被害者であったために、「外国人労働者」としては当時は認識されず、また、日本の法



帝国書院版『新詳地理B 最新版』p.306

制度が彼女たちにエンターテイナー以外の就労の機会を提供しなかったがゆえに、特定の職種に限定されてきた。しかし世界規模でみると女性たちは家事労働者としてフィリピンからシンガポール、香港、中東、さらには西ヨーロッパへ、メキシコから北米へと国境を越えて出稼ぎをしている。80年代以降は、「国際労働力移動の女性化」が指摘されるまでに、女性の海外への出稼ぎが増えており、日本への女性の移動も、こうした大きな流れのなかに位置づけられる。女性たちに続いて、パキスタンやバングラデシュ、イランからの男性の出稼ぎ、90年代以降は、南米から日系人が家族で来日し、夫婦で働くということが日本では起きている。

グローバル化：因果はめぐる

冒頭で述べたように、労働力の移動は経済格差があれば必ず起こるというものではない。80年代までは、旧植民地から旧宗主国へというように、歴史的つながりからの人の移動がおもであった。もちろんこの両者の間に、経済的にも政治的にも力関係の差があってこそ、人の移動が起きていることはいうまでもない。

それに対して80年代以降は、旧植民地以外の国からも多くの人が出稼ぎに来ている。それでは、近年ではどのような要因が国際労働力移動を媒介するようになったのだろうか。まず、国境を越えた経済活動の広がりが、おもな要因のひとつとし

てあげられる。80年代以降は、企業が安価な労働力を求めて海外に生産拠点を移動し、開発途上国に資本主義と消費社会が浸透していった。生活に必要なものをお金で購入しなくてはならなくなり、よりよい賃金を求めて海外への出稼ぎが増えていった。

労働力を受け入れる側の国でも、東京やロンドン、ニューヨークなど世界都市が肥大化するとそれだけ、ビルやホテルの清掃やレストラン業など都市の機能を支えるための底辺労働への需要が大きくなっていく。経済成長を遂げた国の人たちがもはや就労しない底辺労働に就労したのが外国人労働者であった。

「外国人労働者」の内実

ここでは、「労働力移動」に限定して議論してきたが、現実には「難民」、「人身売買」による移動と「労働力移動」を厳密に分けることは難しい。それぞれのカテゴリーは相互に重なりあう部分も大きいためである。たとえば戦後のフランスにはスペインやポルトガルから多くの人々が出稼ぎにきた。しかしこれらの人々は、実際には当時のフランコやサラザール政権といった軍事政権を逃れてきた難民でもあった。ところが労働力が不足から、難民申請をしなくともフランスに入国することができた。このように事実上の難民であっても、難民以外の方法があれば、そちらが選択される場合も多い。80年代に日本に「出稼ぎ」にきたイラン人たちにも、事実上の難民が少なからず存在していることが指摘されている。

このようにあらゆる要因が複雑に絡みあって起きているのが現在の国際労働力移動であり、さまざまな側面から検討しなくては全体像を把握することは難しいだろう。